

近現代の芦屋川

芦屋では、明治時代になっても、江戸時代と同じように農業を中心とする生活が続いていました。芦屋川の流域では、集落が点在し、村々の周りには田畑や山林が広がっていました。そのような中、明治7年（1874）には、文明開化を象徴する官設鉄道（国鉄）が大阪と神戸の間に開通し、芦屋川の川底下をくぐる芦屋川隧道が建設されました。

芦屋が農村から住宅都市へと大きく変化していったのは、市域に鉄道の駅や停留場が開設され、交通の利便性が高まったからです。明治38年（1905）には、阪神電鉄が開通し、芦屋停留場と打出停留場が開設されました。続いて、大正2年（1913）には国鉄芦屋駅が開設、大正9年（1920）には阪神急行電鉄（現在の阪急電鉄）神戸線の開通により芦屋川停留場が開設されました。昭和2年（1927）には、阪神国道電車が開通し、「山打出」・「芦屋駅前」・「芦屋川」・「津知」の4停留場が設置されました。このような交通の整備を背景に、大阪・神戸の実業家たちが風光明媚な住環境を求めて、芦屋川を中心とする駅や停留場の周辺に邸宅を建てはじめたのです。



芦屋川隧道（明治7年〔1874〕開通）

こうした交通の発達とともに、明治40年（1907）頃からは芦屋市の前身である精道村（明治22年〔1889〕～昭和15年〔1940〕）によって芦屋川の改修工事が実施されました。また、明治40年（1907）には、村営芦屋川堤塘遊園地（芦屋遊園地、現・芦屋公園）が開園しました。そして、大正8～11年（1919～1922）に12区に分けて実施された土地耕地整理事業によって整然とした街路区画が作り上げられ、芦屋川の改修事業とともに、その後の都市の形成に大きな役割を果たしました。



阪神電鉄芦屋川橋梁（明治39年〔1906〕発行の絵葉書）

精道村が積極的に進めた芦屋川の改修工事では、それまでの堤防の内側に新たに堤防を築いて川幅を狭めることによって、土地を造成する手法がとられました。大正4～5年（1915～1916）には、芦屋川の第1次大改修工事が実施されました。

大正8年（1919）には、精道村公会堂が設けられました。昭和2年（1927）には阪神国道が開通しました。大正末期もしくは昭和初期には、

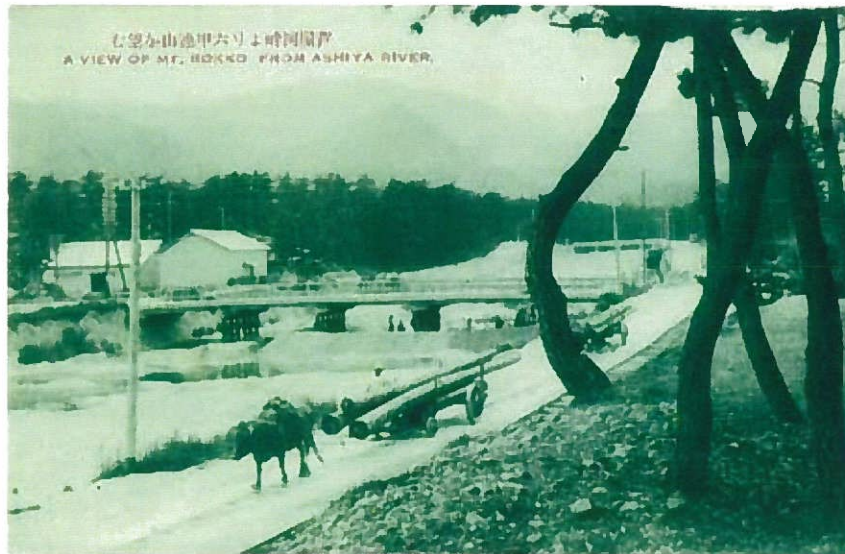


芦屋 1884
ASHIYA
1886
1 この図に対応する現在の地図は
国土地理院発行1:10000地形図
「芦屋」〔京都及大阪12-4-3〕。
2 作成に使用した1:20000複製地
形図は次の4図。
西宮町（明治18年測量）
今津村（明治17年測量）
六甲山（明治19年測量）
神戸（明治18年測量）



芦屋 1932
ASHIYA
1 この図に対応する現在の地図は
国土地理院発行1:10000地形図
「芦屋」〔京都及大阪12-4-3〕。
2 作成に使用した1:10000地形図
は次の3図。
東芦屋（昭和7年修正測図）
芦屋（昭和7年修正測図）
御影（昭和7年修正測図）

芦屋川流域の市街地化のようす（『明治前期・昭和前期 神戸都市地図』清水靖夫 編 1995 柏書房）1 / 15000



初代業平橋（大正6年〔1917〕築）

クロマツが植えられました。なお、業平橋以北の桜は、昭和24年（1949）に植えられました。

昭和13年（1938）7月5日には阪神大水害が発生し、市域は甚大な被害に見舞われました。芦屋川では、開森橋付近の左岸側をはじめとして堤防が10ヶ所で決壊し、大量の土砂があふれ出たことにより、芦屋川の流域一帯が泥の海と化しました。

この大水害の後、昭和14～21年（1939～1946）に、国（内務省、昭和20年〔1945〕より建設省）による河川改修工事が実施され、花崗岩の切石を谷積みした石垣護岸や、谷積みや布積みの堰堤が設けられました。現在の芦屋川の石垣護岸の大部分は、この改修工事によって築かれたものです。それは、堰堤の銘板に示された工事期間が、昭和14年（1939）から昭和17年（1942）までに限られていることから知ることができます。具体的には、上流側から角石堰堤が昭和16年度施工（兵庫県）、河原毛堰堤が昭和15年（1940）10月起工、昭和16年（1941）6月竣工、杖東堰堤が昭和16年度施工（兵庫県）、芦屋川第一号堰堤が昭和14年（1939）11月起工、昭和15年（1940）4月竣工、芦屋川堰堤が昭和17年（1942）1月起工、昭和17年（1942）10月竣工となっています。

戦後になって、昭和31年（1956）には、芦屋公園テニスコートが開設されました。また、芦屋川左岸では、昭和35年（1960）に市役所新庁舎（現在の市役所北館）、昭和38年（1963）に市民会館、昭和56年（1981）に旧芦屋市保健センター（現在の芦屋市役所分庁舎）、平成2年（1990）に市役所南館が建設され、公共施設群を形成しています。

河口では昭和36年（1961）頃から市独自の芦屋浜埋立構想が練られましたが、その後、阪神港湾整備の一環として広域的な立場から兵庫県企業庁が主体となり、昭和44年（1969）

阪神大水害（昭和13年〔1938〕7月5日）



海岸部に防潮堤が建設されました。

芦屋川の第2次大改修工事は、昭和8年（1933）に実施されました。しかし、翌年9月21日の室戸台風による風水害で、高潮による被害を中心に大きな被害を受けました。その後、昭和11年（1936）には、堤防や流失・壊滅した橋の復旧工事が完了しました。

昭和10年（1935）には、業平橋より南に芦屋川に沿ってク

11月より造成工事が着工されました。これにより、昭和50年（1975）には海浜部に広大な埋立地が完成し、住宅地の拡大につながりました。しかし、その一方で、芦屋海浜浴場としても市民に親しまれた美しい砂浜は、完全に消滅しました。

平成7年（1995）1月17日に発生した兵庫県南部地震は、芦屋市を含む阪神地域に甚大な被害をもたらしました。この阪神・淡路大震災によって、芦屋川も大きな被害を受け、その後、復旧・復興事業が行われました。

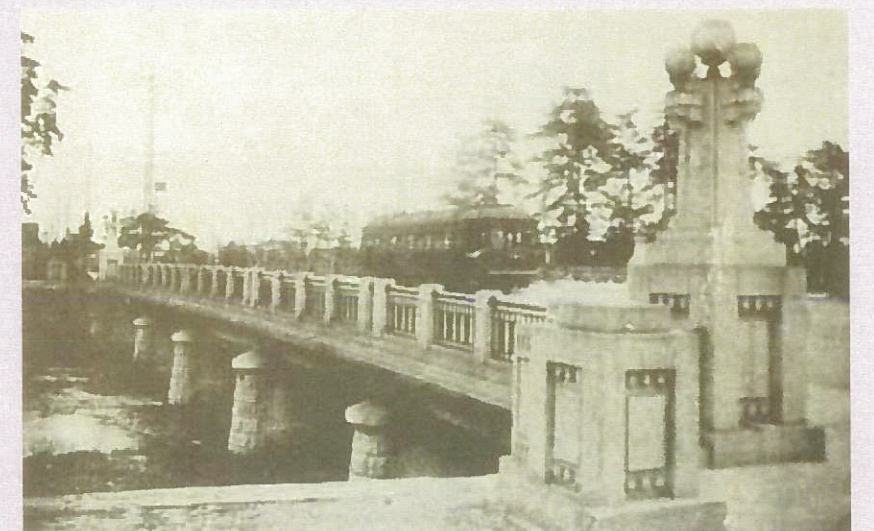
平成22年（2010）10月24日には、都市計画道路である山手幹線が開通しましたが、芦屋川を通過する地点には、景観を保護する観点から川底下に芦屋川隧道が建設されています。

コラム 芦屋川に架かる橋

芦屋川には、上流から、開森人道橋、開森橋、桜橋、月若橋、大正橋、業平橋、公光橋、平田橋、芦屋川橋、鶴塚橋が架かっています。また、今はない橋として、瓦器橋、城山橋、永保橋があります。

これらの歴史をみると、瓦器橋・開森橋・永保橋は、明治17年（1884）に刊行された地誌『芦屋村誌』にすでに記されています。城山橋は、開森橋より上流にあった木橋で、大正7年（1918）以前から架かっていましたが、昭和13年（1938）の阪神大水害で流されました。開森人道橋は、平成11年（1999）に設けられています。現在の開森橋は、昭和28年（1953）に架けられ、昭和38年（1963）に拡張されています。桜橋は、大正末から昭和初期に建設されました。阪神大水害で壊れ、すぐ北側に2代目の桜橋が架けられました。昭和22年（1947）には、3代目のものとなり現在に至ります。月若橋は、阪急電車の開通（大正9年〔1920〕）以前からありました。「ベコベコ橋」、「どんどん橋」とも呼ばれていました。現在のものは、昭和43年（1968）に架け替えられたものです。大正橋は、大正13年（1924）に架けられました。業平橋は芦屋川の第1次大改修工事に伴い、大正6年（1917）に木造のものが架けられました。2代目の業平橋は、阪神国道の建設に伴って大正14年（1925）に架けられました。公光橋はいつ建設されたのか分かっていませんが、大正4年（1915）の刊行物の写真にみることができます。昭和21年（1946）に架け替えられましたが、昭和42年（1967）の集中豪雨で倒壊し、昭和43年（1968）に現在のものが建設されました。平田橋は、大正5年（1916）に仮設の木造橋としてつくられました。現在のものは、昭和39年（1964）に架けられています。永保橋は、第二阪神国道（国道43号線）の開通に伴って昭和36年（1961）に芦屋川橋に架け替えられました。鶴塚橋は、大正の初め頃に架けられたと考えられます。現在のものは、昭和63年（1988）に架けられています。

2代目業平橋（大正14年〔1925〕竣工）



芦屋川沿いの歴史文化遺産

芦屋川のまわりには、数多くの歴史文化遺産があります。ここでは、芦屋川沿いの主な歴史文化遺産を紹介します。なお、位置は裏表紙の地図に示しています。



芦屋川の護岸（左：野面積み 右：谷積み）

① 芦屋川の護岸

芦屋川の両岸は、河原毛堰堤より下流が花崗岩の石垣によって護岸されています。芦屋川堰堤より下流では、流路を一段掘り下げて、その部分も切石の谷積みによる石垣によって護岸されています。

現在の護岸のほとんどは、昭和13年（1938）に起こった阪神大水害の復旧のために、昭和14～21年（1939～1946）に実施された改修工事によって築かれた切石の谷積みによるものです。そのような中、開森橋から月若橋までの間に残っている野面積みの箇所は、昭和4～5年（1929～1930）に実施された芦屋川改修工事に伴うものと考えられます。

② 角石堰堤

切石の谷積みで構築されています。兵庫県によって昭和16年度に築かれました。

③ 河原毛堰堤

切石の谷積みで構築されています。堰堤の右岸側には、「河原毛堰堤 起工 昭和十五年十月 竣功 昭和十六年六月 内務省神戸土木出張所」と刻まれた銘板があります。

④ 杖東堰堤

切石の谷積みで構築されています。堰堤左岸側には、「昭和十六年度施工 杖東堰堤 兵庫県」と刻まれた銘板があります。

⑤ 芦屋川第一号堰堤

切石の布積みで構築されています。堰堤の右岸側には、「芦屋川第一号堰堤 起工 昭和十四年十一月 竣功 昭和十五年四月 内務省神戸土木出張所」と刻まれた銘板があります。



石垣に使われた水車場の石臼（搗き臼）

⑥ 水車場に伴う石臼

芦屋市域を含む六甲山地南麓では、江戸時代中期（18世紀頃）から、急流を利用して産業用の巨大水車群が数多く稼動していました。これらの水車は主に菜種や綿実の油絞りや酒造用の精米のために使われ、明治時代から大正時代には「灘目素麵」の原材料となる小麦粉の製造なども加わりました。しかし、大正時代から昭和時代初期にかけて電動機が普及したため、水車の需要は激減しました。市域にあった水車も動力の近代化の波に追われ、昭和20年代までにすべて廃絶しました。

山芦屋町付近をはじめ芦屋川中流の右岸では、数多くの水車場で使用されていた石臼が宅地石垣の石材として転用されています。さらに、山芦屋町では、水車場跡が発掘されています。



旧山邑家住宅（国指定重要文化財）

⑦ 旧山邑家住宅（国指定重要文化財）

大正13年（1924）頃、醸造家の山邑太左衛門が建てた別荘です。設計には、アメリカ人建築家フランク・ロイド・ライト（1867～1959）が携わりました。ライトは、当時、日本に滞在して帝国ホテルなどの設計に従事していましたが、山邑の依頼を受けて芦屋の地を訪れ、この地がライト自身の建築上の自然観にふさわしいと認識したと言われています。

建物は、約4,700㎡の敷地に外観4層の構成で、栃木県産の大谷石と鉄筋コンクリートでつくられています。昭和49年（1974）5月21日には、鉄筋コンクリート造建物としては初めて国指定重要文化財に指定されました。そして、現在、ヨドコウ迎賓館として公開されています。

⑧ 阪神大水害芦屋川決壊之地石碑

昭和13年（1938）、阪神地方は空前の大水害に見舞われました。6月28日から降り出した雨は、7月5日には最大雨量（1日326ミリメートル）を測る大暴風を伴う豪雨となり、土石流の発生によって芦屋川と宮川が氾濫しました。それに伴う土砂崩壊や岩石流出によって、芦屋市の前身である精道村（明治22年〔1889〕～昭和15年〔1940〕）の大半は泥海と化しました。

この水害による精道村の被害状況は、死者3人、重傷者2人、家屋流出14戸、全壊14戸、半壊111戸、床上浸水790戸、床下浸水1,458戸、橋梁流出6、破損8、道路堤防の破損決壊10となっています。

開森橋東詰付近の決壊場所には、水害から50年経った昭和63年（1988）7月に「阪神大水害芦屋川決壊之地」と刻まれた石碑が建てられています。



阪神大水害 芦屋川決壊之地石碑

⑨ 猿丸翁頌徳碑

この石碑は、奥池（奥山溜池）をつくった猿丸又左衛門安時（1804～1879）を称えるため、大正5年（1916）に芦屋遊園地内に建立されたものです。

江戸時代に、芦屋の村々は日照りが続くと田畑の水不足に悩み、水争いが絶えませんでした。そこで、当時、芦屋村の年寄であった猿丸又左衛門安時は、天保12年（1841）から約20年の歳月をかけて、奥池を築造しました。また、安時は幕末から明治にかけて18ヶ村の総代庄屋として村政の窮迫の打開につとめ、幕府および県令からたびたび表彰されました。

安時の墓所は、阪急芦屋川の東方約100mに位置する猿丸家墓地にあります。また、芦屋神社（東芦屋町）社殿の裏庭には、安時が76歳のときに「万代のぬさにと梅をうえおかば 花咲くごとくに神やめづらん」と詠んだ奉獻梅樹の句碑が遺されています。



猿丸翁頌徳碑



初代桜橋の橋脚

⑩初代桜橋の橋脚

桜橋は、阪急芦屋川駅のすぐ北側に架かっています。現在のものは3代目です。

初代の桜橋は、芦屋川左岸側の住民が芦屋川右岸側にある大正9年（1920）開設の阪急芦屋川駅に行く利便性を図るために、大正末もしくは昭和初年につくられました。その名称は、「潮見ざくら」に由来します。

初代の桜橋は、昭和13年（1938）の阪神大水害によって損壊し、現在、橋脚の下部だけが川底に残っています。その後、2代目の桜橋が初代のもののすぐ北側に架けられ、さらに昭和22年（1947）に改修されて現在に至ります。

⑪徳川大坂城東六甲採石場の石材

大坂城は、天正11年（1583）に豊臣秀吉によって築されましたが、慶長20年（1615）に起こった大坂夏の陣によって豊臣家が滅びた後、元和6年（1620）から寛永6年（1629）にかけて、徳川幕府によって再築されました。この大坂城は「徳川大坂城」と呼ばれています。徳川大坂城は、幕藩体制の下、西日本の64家もの大名たちが工事を分担した「天下普請」で築されました。

徳川大坂城の石垣用石材の採石場は西宮市から芦屋市、神戸市東灘区にかけての六甲山中や山麓に分布しており、現在、「徳川大坂城東六甲採石場」と呼ばれています。芦屋川沿いに移設して展示されている2石の石材は、徳川大坂城東六甲採石場に含まれる芦屋市西山町で平成21年（2009）に実施された発掘調査で出土したもので、石材を割るために矢（くさび形の道具）を入れ込む「矢穴」が彫られています。



徳川大坂城東六甲採石場の石材

⑫官設鉄道芦屋川隧道跡

現在、JR東海道本線が芦屋川をくぐり抜ける場所には、かつて煉瓦で築かれた芦屋川隧道がありました。このトンネルは、明治7年（1874）5月に開業した大阪―神戸間の官設鉄道（現在のJR東海道本線）に伴い、芦屋川の下に建設された天井川トンネルです。工事は、明治4年（1871）5月から明治7年（1874）3月にかけて、2年10ヶ月の歳月を要しました。高度な土木技術によって築かれた芦屋川隧道は外国からの評価も高く、明治9年（1876）にイギリスで発行された『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』で挿絵を用いて紹介されています。

その後、大正15年（1926）の神崎―東灘間の複々線化工事に伴って大正9年（1920）頃に解体され、芦屋川跨線水路橋に改築され現在に至ります。

松ノ内緑地の南付近から三條南町の踏切までの線路北側にある斜面には、煉瓦構造物の塊が多数埋め込まれていますが、これらは芦屋川隧道が解体されたものと考えられます。



官設鉄道芦屋川隧道跡
(現・JR東海道本線芦屋川跨線水路橋)

⑬芦屋川堰堤

切石の布積みで構築されています。堰堤右岸の石垣には、「芦屋川堰堤 着手 昭和十七年一月 竣功 昭和十七年十月 内務省神戸土木出張所」と刻まれた銘板があります。

⑭芦屋仏教会館

前田町に所在する近代建築です。芦屋仏教会館の母体であった崇信会は、丸紅商店（現・株式会社丸紅）の初代社長であった伊藤長兵衛（1868―1941）の仏恩報謝の発願に基づき誕生したもので、大正13年（1924）9月11日に精道村公会堂において仏教講演会を開いたことに始まります。そして、崇信会の発展とともに、昭和2年（1927）6月5日に芦屋仏教会館が開館し、昭和5年（1930）3月28日には財団法人芦屋仏教会館が設立されました。初代理事長には、伊藤長兵衛が就任しました。平成24年（2012）からは、公益財団法人芦屋仏教会館となっています。

大阪を中心に数多くの近代建築を手掛けた建築家である片岡安（1876―1946）が設計し、高橋組が施行しました。構造は鉄筋コンクリート造で、地上3階、地下1階建てです。屋根は陸屋根で、外壁は人造石貼大壁造でクリーム色を呈しています。また、蓮をかたどったステンドグラスがはめ込まれています。建物内の大講堂には聖徳太子像が安置されています。昭和24年（1949）5月1日には、3階にある書庫を改装して市立図書館が創設され、昭和29年（1954）2月11日に打出小植町に開設した図書館に移転が完了するまで使われました。

平成15年（2003）には、西部第一地区震災復興土地地区画再開発事業に伴う道路拡張工事が敷地にかかったため、解体することなく曳家工法で約2.5m西側に移動しています。



芦屋仏教会館

⑮業平橋

業平橋は、国道2号線が芦屋川を渡る地点に架かる橋です。橋名は、『伊勢物語』で芦屋とゆかりが深いと記されている在原業平に由来しています。この場所に橋が架けられたのは、大正6年（1917）3月の芦屋川改修工事の際で、当時は木橋でした。

大正14年（1925）から始まった阪神国道（国道2号線）の整備に伴い、同年12月30日に花崗岩と鉄筋コンクリートによる橋に改築されました。その後、阪神国道は昭和2年（1927）4月1日に開通しました。昭和11年（1936）には、阪神国道をくぐる歩行者用のトンネルが設けられています。



業平橋

⑯市制施行記念国旗掲揚台

旧芦屋市保健センター（現在の芦屋市役所分庁舎）の敷地南東部に残されている国旗掲揚台の対となる石柱の片方です。この石柱には、昭和15年（1940）の市制施行と、同年の皇紀2600年の記念について記されています。



市制施行記念国旗掲揚台



芦屋警察署

⑰芦屋警察署

現在の芦屋警察署は、平成13年(2001)竣工のものですが、旧庁舎の南西隅にあった正面玄関が部分的に保存されています。旧庁舎は、昭和2年(1927)4月12日に起工し、同年9月6日に竣工、開庁式を挙りました。敷地面積705坪、建築総坪数382坪で、本館は近代建築の粋を誇る鉄筋コンクリート造3階建てでした。

保存されている旧正面玄関は、花崗岩でつくられています。兵庫県営繕課による設計で、アーチの要石にはミミズクが彫刻されています。



阪神電鉄芦屋川橋梁

⑱阪神電鉄芦屋川橋梁

阪神電気鉄道株式会社では、明治38年(1905)4月12日に大阪(出入橋)―神戸(三宮)間が開業しました。現在、阪神電鉄芦屋駅のホームになっている芦屋川橋梁の橋脚は、中央の部分が石積みで、その両端をコンクリートで南北方向に拡張しています。この石積みの部分が、明治38年(1905)の阪神電鉄の開通時に築かれた橋脚と考えられます。当時の絵葉書には、少なくとも8基の石積みの橋脚が写っており、その内の5基が現存しています。これら石積み部分の規模は、南北約6.7m、東西約1m、高さ約4.4mを測ります。石材は直方体の花崗岩切石です。1石あたりの大きさは、長さが31.5～52cm、高さが30.5～31.5cm、奥行は不明です。



芦屋遊園地跡(現・芦屋公園)

⑲芦屋遊園地

芦屋遊園地は、阪神間において最も古い遊園地です。この遊園地は精道村が明治39年(1906)に計画したもので、大正6年(1917)に阪神芦屋駅から海までの間につくられました。別名、芦屋公園、松浜遊園とも呼ばれています。

大正8年(1919)～大正11年(1922)に国鉄以南の芦屋川改修工事を行い、河川の改修で川幅を狭めたことによって、両岸に広い土地が新しくできました。その土地を払い下げ、遊園地や宅地としました。その際、芦屋遊園地も整備されました。それまでは、大松の間に小松が自生し、松露の産地でした。古い大きな松は、芦屋川の洪水があるたびに水防用に伐採されたり、大風のために枯死したりしました。一方、小松が成長しています。

大正年間、兵庫県が精道村に砂防工事を命じ、猿丸又左衛門安明は実生の松を芦屋川畔に繁茂させようと、毎年陸海軍記念日に学童の5学年以上の男子に黨の輪数個を持参させ、



「芦屋遊園」石碑

松の実生苗を植え、その周囲を包ませ保護しました。このため、夏の日照りにも枯死しないで良く成長し、現在のような松林になりました。遊園地には、ブランコ、木馬、すべり台などがありました。

なお、芦屋公園テニスコートは、芦屋遊園地の松林を切り開いて、昭和31年(1956)に開設されたもので、当時、東洋一の設備を誇っていました。開場した同年には、第11回国民体育大会の公式庭球球技会が開催されています。

現在の芦屋公園内には、「芦屋遊園」と刻まれた石碑が残っています。



猿丸君彰功碑

⑳猿丸君彰功碑

芦屋公園にある猿丸君彰功碑は、昭和5年に建立されました。精道村時代に活躍した猿丸又左衛門安明(1872-1920)の生い立ちや精道村長を2回、芦屋郵便局長、県議員等を務めた経歴、国鉄芦屋駅の創設や芦屋川の改修および耕地整理などの公共事業を企画し、精道村の発展の基を築いた功績が刻まれています。

なお、題額は、当時立憲政友会総裁であった犬養毅の揮毫によります。



ぬえ塚

㉑ぬえ塚

『摂陽群談』、『摂津名所図会』などに記されている鶴退治の伝承に基づくもので、石碑は大正6年(1917)に建てられたものです。伝承のあらすじは、次のとおりです。

およそ800年ものむかし、源頼政が京都の御所を騒がす鶴(トラツグミの別称)という鳥の鳴き声に似た怪物を弓矢で射殺すと、頭がサル、体はタヌキ、手足はトラ、尾はヘビという妖怪でした。その死体を丸木舟にのせて、川に流したところ、淀川、大阪湾を流れ、芦屋の浜に流れ着きました。村人たちは祟りを恐れて、丁寧に塚をつくって弔い、この塚のことを「鶴塚」と呼ぶようになりました。



旧芦屋遊園乗合バス待合所

㉒旧芦屋遊園乗合バス待合所

旧芦屋遊園乗合バス待合所は、昭和初期につくられたと考えられます。現在は、芦屋公園内の休憩施設となっています。